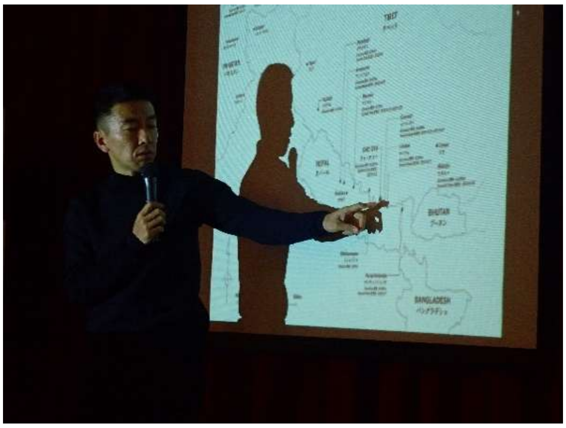
ヒマラヤの集い 2026 報告

◎テーマ：8000M 峰 14 座に通った 23 年間
◎講　師：写真家　石川直樹氏
◎会　場：宇都宮コンセーレ　アイリスホール
◎日　時：令和 8 年（2026 年）2 月 11 日（祝・水）開会 14：00　閉会 15：50



予定の 1 時間以上も前から多くの来場者が集まりだし、開場を早めた。遠方からの参加者も多く、すぐに満席となった。近著『最後の山』は「本の雑誌」で 2025 年度のベストセラー3 位に選ばれ、2026 年 2 月に読売文学賞で随筆・紀行賞を受賞している。石川さんにサインやツーショット写真を求めるファンの方々も多く、人気のほどが窺われる。渡邉雄二支部長による開会挨拶と講師紹介に続き、講演会は開始した。

石川さんは 1977 年、東京生まれ。高 2 の夏休みに親御さんには心配させまいと治安の良いシンガポールに行くとウソをついてインドに一人旅に出た。インドでしつこい物乞いや客引きに辟易し、ネパールに入った。そこで初めてヒマラヤ山脈を目にした。それが石川さんの長い旅の原点となった。

20 歳の時、日本山岳会デナリ（マッキンリー）気象観測隊で、観測機器運搬設置のボランティアとして活動し、22，23 歳の時、北極から南極までの道のりをスキーや自転車など主に人力の移動手段によって旅をするという国際プロジェクト（Pole to pole 2000 計画）に、日本からひとり参加した。南極には 3 回訪れ、ポリネシアの島々も廻った。石川さんは地球上の 8000M峰全 14 座に完登した今でも自らを登山家ではなく「写真家」と名乗る。より困難なルートや未踏ルート、無酸素、アルパインスタイルを目指す「登山家」とは違うと言う。旅人として、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、大きく重い蛇腹式の中判フィルムカメラ（プラウベル・マキナ、マミヤ 7)、1 本で 10 枚しか撮影できないフィルムを愛用している。写真家としての潔さと矜持が感じられる。

23 歳の時、2001 年に、チベット側から、2011 年にはネパール側からもエベレストに登頂した。2012 年にマナスル、2013 年にローツェ、2014 年にマカルーに登頂した。2015 年には K2 とブロードピークに挑むが、2 座とも登頂できなかった。2019 年に再び K2 に挑戦したが、難所である 8200M 近辺の雪の状態が悪く、余儀なく登頂を断念した。だが、2 度目の K2 敗退直後、若いシェルパの提案でガッシャブルムⅡに転戦し、K2 から下山後 1 週間でガッシャブルムⅡの山頂に立った。コロナ禍による足止めの期間を経て、2022 年に 5 座（ダウラギリ、カンチェンジュンガ、K2、ブロードピーク、2 度目となるマナスル)、2023 年で 4 座（アンナプルナ、ナンガパルバット、ガッシャブルムⅠ、チョオユー）に登頂を果たした。そして 2024 年 10 月、2001 年のエベレストから数えて 23 年間の長い旅の一区切りとなる「最後の山」：シシャパンマの登頂を果たした。

なぜ石川さんは 2012 年に「登頂」したマナスルに 2022 年に再度登ったのか。それは「真の頂上」問題に深く関わっていた。マナスルは 1956 年に日本山岳会隊が初登頂した 8000M峰で（日本山岳会栃木支部の初代支部長故日下田實氏が初登頂の最年少の隊員だった)、このときは最高地点である「真の頂上」に登頂した。8000m峰の 14 座のうち日本人が初登頂を果たしたのはこのマナスルだけ。そして、「真の頂上」問題という点でも、マナスル、ダウラギリ、アンナプルナは近年、歴史的に重要な山になってきた。これらの山の本当の頂上は実際に登っているときには見えづらく、長い間違う場所が頂上だとされていた。或いはここまで到達すれば登頂したと見なす「認定ピーク」が存在したことが明らかにされた。分かりやすく例えれば、剣が峰には行かずとも富士山の火口の周りのどこかを「山頂」と見なすようなことだという。

石川さんは 2012 年には何十年ものあいだ多くの人が引き返してきたポイントに到達し、“登頂した”と認識し下山してしまった。2022 年に登った本当の頂上へは、「偽ピーク」から一旦下がって、トラバースをした後に、さらに登り返すルートを取った。体力的にも厳しく、危険を伴うが、石川さんは若く信頼できるシェルパ：ミンマ G と共にマナスルの本当の頂上に立った。

2019 年の K2 以降、石川さんはヨーロッパやアメリカのエージェントではなくネパールのミンマ G が代表を務める会社を利用している。従来もっぱら登山者を支える側だったシ

ェルパの中に、自由闊達に好きな登山を追求する若者たちが現れた。それまでの常識では8000M 峰の連続登山などは考えられなかったが、K2 の状況が悪ければ柔軟にガッシャブルムⅡに切り替えるように新しい時代を切り拓く若いシェルパと知遇を得、以来ザイルを結び合っている。

14 座の最後の山シシャパンマにもドラマがあった。シシャパンマに行った最初の年 2023 年は、2 人の女性が「アメリカ人女性初の 14 座登頂」をかけて先を競っていたタイミングだった。眼前の栄光に眼が眩み、圧倒的な山に対する畏敬の念は払われなかったのかも知れない。結果、この女性 2 人とシェルパの合計 4 人が次々にピンポイントの雪崩に巻き込まれて亡くなるという悲惨な事故が起きた。頂上に向けて石川さんのチームも登攀中だった。石川さんが撮影した先行しているアメリカ人女性のチームが映った写真を見させていただいた。写真の 10 分後には雪崩は発生している。黒い点にしか見えない小さな人間の姿と危険すぎるシシャパンマの頂上直下の雪壁の高さに震えが止まらなかった。その写真からの迫力に畏怖した。ヒリヒリするような生命の危機と人の活力も同時に感じた。この事故を受けて、2023 年のシシャパンマの閉山が決まった。

石川さんの友人でもあるアメリカ人女性たちの死を乗り越え、石川さんとミンマ G は翌 2024 年の 10 月に登頂し、23 年間の長い旅を終えた。

講演後の質疑応答では会場の質問に対して、時間を超えてもひとつひとつユーモアを交え、丁寧に応えていただいた。質問の中で、次の目標は？の答えは「条件さえ許せば、火星の最高峰オリンポス山（標高 21,900M）に行くこと」だった。地球では登り尽くしてしまった最高の“クライマー”石川直樹なら登れる！と思った。

最後に渡邉支部長からの情報提供と謝辞で終了した。休憩なしの 2 時間があっという間だった。その後石川さんを囲み関係者 13 名で懇親会を行なった。（文責　猿山）